

# CAMPUS NOW

早稲田大学広報

No. 253  
2024/10

特集

## For the Future of Society

巻頭インタビュー  
セーリング選手  
岡田奎樹

KEIJU  
OKADA

岡田 奎樹さん



## 仲間と一緒に打ち込んだ日々が、自分を成長させた

パリ2024オリンピック、8月8日のマルセイユ・マリーナ。セーリング混合470級の最終レースで、日本チームが銀メダルを獲得した。スキッパーとしてヨットの舵を取ったのは、本学スポーツ科学部の卒業生・岡田奎樹選手だ。日本勢がセーリングでメダルを獲得するのは、20年ぶりの快挙となる。

「3位で臨んだ最終レース。『ベストを尽くそう』と決め、自分らしく風を捉えられたことが、追いつけにつながりました。ペアとして自分を信じてくれた吉岡美帆選手には、感謝の気持ちでいっぱいです。ただし目標は金メダルだったので、悔しい思いも残りました」

波の形状を見ながら、風向きや風速を予測し、ヨットを進めるセーリングは、極めて繊細な競技だ。5歳の時に地元・九州で競技を始めた岡田選手は、自然の中で洞察力を養っていった。

「父の影響でセーリングを始め、最初は競技として意識していませんでした。別府湾を流れる風を受けて進み、海上から美しい高崎山を眺めるのが好きで、自然と戯れることを楽しんでいました」

小学校3年生で出場した全日本OP級選手権大会では、年上の選手を抑えて優勝。中学・高校でもトップクラスの戦績を残し、徐々に頭角を現していった岡田選手。早稲田大学に入学したのは、ヨット部のOB・原

田龍之介選手への敬意があったからだ。

「ロンドンオリンピックに出場した原田さんが、卒業後も部を出入りしていると聞き、入部を志しました。集団行動が重視されたヨット部では、コミュニケーションやチームビルディングの面において、成長できたと感じます」

メダル獲得を目指し初めて臨んだ東京2020オリンピックでは、悔しい思いも経験した。7位(男子470級)という結果を、岡田選手は「経験不足」と受け止め、さらなる飛躍につなげていった。

「初出場にコロナ禍が重なり、コンディションを調整できなかったのは、経験不足以外の何ものでもありません。以後3年間、船や風の勉強、道具の調整、ペア間の連携強化を重ね、パリでは、開幕の時点でメダル獲得を確信していました」

激闘を終えた岡田選手は現在、所属会社のある東北地方で幼稚園を訪問するなど、地域貢献活動にも携わっている。

「故郷の福岡で子どもたちにセーリングを教える予定もあり、今から楽しみです。セーリングに限らず、屋外で遊ぶことを好きになって、体や感性を育ててほしいですね。自然の恵みや人と関わる素晴らしさは、若い自分を成長させてくれました。早稲田の後輩たちもぜひ、仲間と一緒に全力で何かに打ち込んでほしいです」



## PROFILE

1995年福岡県生まれ。5歳からセーリング競技を始める。2018年早稲田大学スポーツ科学部卒業。在学中はヨット部に所属。2021年東京2020オリンピックでは外園潤平選手と組んだ男子470級で7位。2023年世界選手権混合470級優勝、杭州アジア大会混合470級金メダル。2024年パリ2024オリンピックでは吉岡美帆選手とのペアで470級銀メダル獲得。トヨタ自動車東日本株式会社所属。



岡田奎樹選手(右)と吉岡美帆選手(左)

# For the Future of Society

早稲田大学はこれまでの研究・教育の成果を社会に還元・発展させるべく、多くの地方自治体や国内各地の企業などと連携してさまざまな取り組みを行っています。さらに各地で行われる学生のボランティア活動も支援しており、その活動の輪は全国に広がっています。本特集では、教育、研究、ボランティアなど、さまざまな関わり方で地域社会のより良い未来を目指して活躍する学生の姿をお届けします。

このほかにも早稲田大学では全国各地でさまざまな地域連携活動を展開しています。

詳しくはWebページ「地域で知る早稲田大学の取り組み」からご覧いただけます。



## 大阪府箕面市

### 教育活動などの相互協力

2022年、早稲田大学と箕面市教育委員会は、教育活動などの相互協力が可能な分野において連携・協力することを目的とする協定を締結。箕面市内の小学生を対象とした理科の授業や、スポーツ指導者向けの講習会の実施を計画しました。



## 高知県宿毛市

### 持続可能な森林保全活動

本学建学の母と称される小野梓ゆかりの地、高知県宿毛市が所有する市有林の一部区域の名称を「早稲田の森」とし、同市では、地域の子どもたちと取り組む持続可能な森林保全活動を行っています。



## 佐賀県唐津市

### 地域連携ワークショップ

早稲田大学と唐津市は、「唐津市と早稲田大学との協働連携に関する協定書」を締結。その一環として行った「地域連携ワークショップ」では、同市が直面している地域課題について、学生が現地でのフィールドワークなどを行い、解決策の提案を行いました。



## 宮城県気仙沼市

### 震災復興支援を経て次なる連携へ

2024年8月、早稲田大学は気仙沼市と防災・減災、地域の活性化などを目的に包括連携協定を締結。同市とは東日本大震災の復興支援をきっかけに交流を続けており、発生直後からがれき撤去などの活動を展開していたサークル「気仙沼チーム」は、現在も仮設住宅でのお茶会開催や高校生への学習支援などのボランティアを行っています。



全国各地へ広がる取り組みをピックアップ

## 北海道釧路市

### 地元からの支援のもとフィールドワークを実施

2016年に「早稲田大学文学学術院と釧路市との相互協力に関する協定」を締結。文学部社会学コースの嶋崎尚子教授ゼミでは、「“生きている炭鉱(ヤマ)”と釧路研究」と題し、2019年までの7年間、釧路市立博物館を中心に地元釧路市の全面的なご理解・ご支援のもとフィールドワークを実施。その後も道内各産炭地でゼミ活動を展開しています。



## 東京都西東京市

### 地域交流スポーツイベントの実施

早稲田大学と西東京市は、2014年に「西東京市と早稲田大学との協働連携に関する協定」を締結。年に1回、地域交流スポーツイベント「早稲田スポーツフェスタin東伏見」を開催しています。



## 岐阜県八百津町

### 音楽を通じた文化交流 中学校でのアウトリーチも実施

岐阜県八百津町からの「音楽を通じた文化交流を」との提案により、2016年から音楽分野の学生団体が同町でコンサートを開催。町内の中学で合唱のアウトリーチ活動も行っています。八百津町は「命のビザ発給」で知られる杉原千畝ゆかりの地でもあり、参加学生は杉原千畝記念館を訪問、その功績について学びます。





法学部3年  
武石侑里子さん

## 能登半島地震の復興支援で感じた 活動を継続することの大切さ



1



- 1 「繋いだ「ご縁」を糧に気仙沼で新たな挑戦を」を理念に活動を行う気仙沼チーム
- 2 珠洲市の災害ボランティアセンター。ほかの学生団体やボランティア経験豊富な方々など多くの人が集まる

## WAVOCのボランティアプログラムで 珠洲市の災害復興支援に参加

中学校の修学旅行で、東日本大震災の被災地である岩手県陸前高田市に行った私は、当時から災害復興支援に強い関心を抱いていました。大学入学後は平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)の復興支援活動から生まれたサークル「早稲田大学気仙沼チーム」に所属し、幹事長を務めています。宮城県気仙沼市の地域貢献活動に携わり、地元の方々から「ありがとう」という言葉を受け取り、少しずつボランティアの意義を考えるようになりました。そうした中で今年1月に能登半島地震が発生、テレビで現地の様子を見た時、直感的に「行かなければ」と思いました。

その後5月になり、WAVOCの「能登半島地震 災害復興支援ボランティア」で、石川県珠洲市の復興支援に参加し、現地を訪れました。発災から約5カ月が経過した当時でも、道路や水道の整備は進んでおらず、現地の方とどのように接したらよいのだろうか、到着した時は不安な気持ちになりました。

現地では、壊れたり不用になった家具などの集積所への運搬をお手伝いしました。避難せず暮らせていても、家屋全体が傾いていたり、屋根が倒壊したりと、生活できないスペースがありました。ある高齢者のお宅では、来訪予定だったお孫さんのために布団を用意していましたが、それが地震で叶わなくなって片付けるという作業もあり、胸が痛みました。日帰りの活動で滞在時間は短かったのですが、ちょっとした作業にも感謝してくださりました。厳しい環境でも温かく接して下さる皆さんと話す中で、「わずかなお手伝いで、感謝されてもよいのだろうか」と、複雑な心境にもなりました。同時に、被災地の復興支援は「行った」という自己満足で終わらせてはならず、その時々で何ができるかを考えながら、継続的に関わっていくことが大切だと思うようになりました。

東京に帰った今、ゼミやサークルなど、当たり前のように過ごしている日常生活が、いかに貴重であるかを実感します。今後も一日一日を大切にしながら、在学中に再び能登半島に行きたいです。

2

## 副専攻「地域連携・地域貢献」の始動に伴い 学生コミュニティ「結の芽」を設立

地域活動に関心のある学生のコミュニティ「結の芽」で、企画や運営を担当しています。早稲田大学では、各学部の研究室、ボランティア、学生団体、サークルなど、さまざまな形で学生が地域活動に関わっており、2024年には全学副専攻「地域連携・地域貢献」が開設されました。こうした学生同士の横のつながりを強化し、情報交換や協働を活性化したいと考え、副専攻新設に携わった教職員の方に直接相談し、結の芽設立が実現しました。

早稲田キャンパス内の「WASEDA共創館」に、地域連携に関する学生のためのスペースがあります。また、学生のみならず卒業生や自治体の方々も気軽に足を運んでいただけます。月に1～2回開催している交流会「地域カフェ」では、毎回テーマを決めてディスカッションやフリートークを実施しており、社会人の方と学生の交流から地域での取り組みが生まれるなど、新たな共創の場として機能し始めています。

私自身は社会科学部の「農村デザイン研究ゼミ」に所属し、静岡県伊豆市の茅野という地域でフィールドワークを行っています。伊豆市は棚田やわさび栽培が盛んであり、地域の魅力を発信するプロモーションビデオを作成したり、猪や鹿の獣害対策を考えるワークショップを企画したりと、農家の方々と連携して活動してきました。地域課題というと、座学やインターネットで得た情報が先行しがちですが、実際に現地の方々と接してみると、視点が変わることが多いです。特に農業は、東京で育った私にとって発見が多く、大きな農業機械が入れない棚田特有の事情、水路の点検や熱中症の危険など、農作業を体験することで困難や課題を知ることができます。

こうした経験から、地域に対する理解をより深めたいと、結の芽を構想しました。一口に地域貢献といっても、例えば理工系の学生は建築や都市計画といった視点を備えているなど、ほかの学生は自分とは異なる発想を持っています。さまざまな立場の人と出会い、知恵を交換しながら、卒業後も地域貢献に挑戦したいです。

① 情報交換・共有のために開催される、結の芽の交流会「地域カフェ」。早稲田キャンパス19-2号館のWASEDA共創館にて

② 社会科学総合学院・落合基継准教授の「農村デザイン研究ゼミ」のフィールドワークで、わさびの植え付けをする学生

1



2

地域で活動する学生が集まり  
情報を共有できる空間を設立

社会科学部4年  
清水遥人さん



創造理工学部4年  
田宮嘉成さん

交通計画の研究を通じ、  
より良いまちづくりの形を探る

### 自治体と住民の合意形成プロセスから 都市交通のあるべき姿を追う

幼い頃から鉄道業界で働きたいと思っていた私は、土木や交通を学ぼうと高校で理系を選択し、創造理工学部の社会環境工学科に進学。森本章倫教授の研究室に所属し、都市計画や交通計画を学んでいます。大学院生である研究室の先輩は、実地調査やデータ分析を駆使しており、学部生の私たちはシミュレーションやプログラミングといった手法の指導を受けながら、日々研究に没頭しています。また、学部の講義では、橋やトンネルといった構造物の建築的知識など、交通の世界における基礎知識を身につけました。

卒業論文に向けた研究テーマは、自治体がLRT<sup>\*</sup>を導入する際のプロセスです。LRTは移動の利便性向上、渋滞の解消、景観の刷新などプラスの効果が多く、全国で約40の自治体が導入を検討していますが、議会や公聴会を通じた住民・関係団体の合意形成が不可欠であるため、一概に前進しているとはいえません。私は地域の交通計画や市民団体の活動、SNSの波及効果を分析し、導入に至る障壁を自治体ごとにグループ化することで、改善すべき要因を提示したいと考えています。

プライベートでも鉄道が好きで、これまで46の都道府県を旅行してきました。また、サークルは千葉県夷隅地域の地域活性化活動を行う「いすみっこ」に所属し、地元の鉄道会社や役所、漁業組合の方々と協業しながら、地域課題の解決に取り組んでいます。同地域では人口流出が進む一方で、移住先としての人気も高いという特徴があり、仕事を互いに手伝うなど、横のつながりが強固です。地元住民と移住者が楽しそうに交流する姿に触れ、コミュニティの魅力を改めて感じました。

さまざまな地域を見てきた中で私が学んだのは、地域の魅力や課題を幅広い人が理解することの大切さです。行政と住民、地域の外側と内側など、複数の関係者が同じ情報を共有することで、新たな取り組みが可能になると思います。卒業後は鉄道会社で勤務する予定です。学問で得た理論と、現地で身につけた行動力。両方を組み合わせ、今後も地域社会に貢献していきたいです。

\*LRT…Light Rail Transit。低床式車両の活用や軌道・電停の改良により、乗降の容易性、定時性、速達性、快適性などに優れた軌道系交通システム



1



2

- ① いすみ市に移住して酪農を始められた方を訪問し、搾乳小屋を建てる手伝いをしている様子
- ② 2023年8月に開業したJR宇都宮駅から隣接する栃木県芳賀町を結ぶLRT「ライトライン」

## 主専攻、副専攻、課外活動を活用し 演劇を通じた地域活性化に挑戦

防災教育の先進自治体ともいわれる東京都荒川区で育ち、災害発生時の互助など防災関連の地域課題に関心があった私は、「地域探究・貢献入試(当時は『新思考入試』)」で早稲田大学に入学しました。入試では、中学・高校で取り組んでいた演劇を生かし、演劇を通じた交流によって住民を孤立させないコミュニティを作る施策をレポートにまとめ、提案しました。

入学後も、演劇と地域連携の両方を学んでいます。文化構想学部では演劇を中心に授業を履修し、身体表象論のゼミに所属。サークル「劇団くるめるシアター」では、仲間たちと演劇活動に熱心しています。地域連携について体系的に学ぶ「地域連携実践コース」\*の修了も目指しており、さまざまな地域のフィールドワークにも参加しました。

その一つ、岡山県津山市の「地域連携ワークショップ」では、市長や地元事業者の方々へインタビューを行い、地域の魅力を起点にした誘客施策を提案しました。観光名所が点在する津山市には、市全域を「屋根のない博物館」に見立てたまちづくりの構想があります。そこで私たちは、市内共通のパンフレットや看板により、PRの一体感を強化する施策を提案。市長からは「東京の学生の視線を求めている」と期待されていたのですが、プレゼンテーションではデザインのアイデアを評価していただけました。

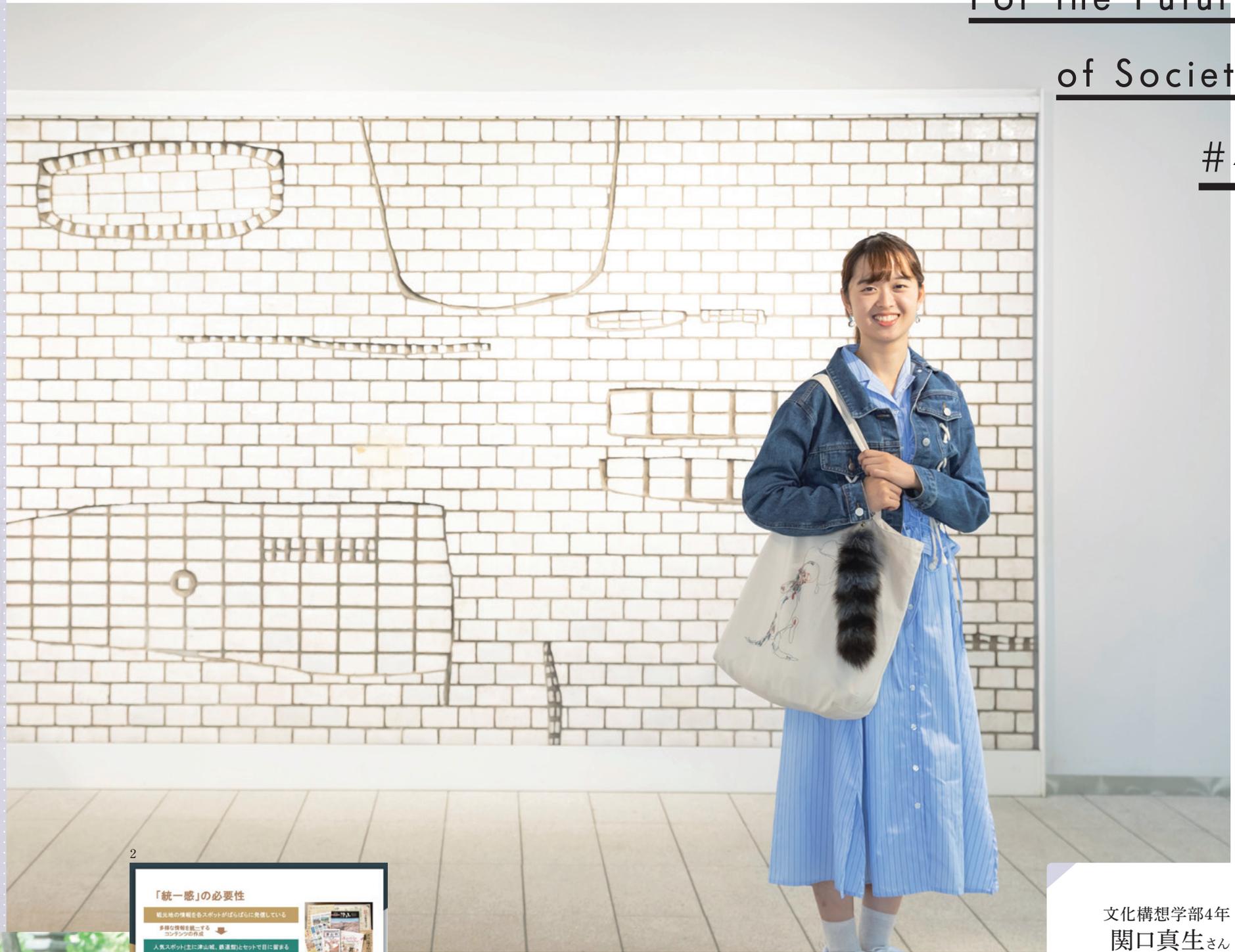
演劇に関しては、早稲田大学が文化交流協定を締結する岐阜県美濃加茂市で、オリジナル演劇作品『夢、のち』の映像上映を行いました。主宰補佐、演出、役者として深く関わったことで、集団における自分の役割を学ぶことができました。また、同作品はシェイクスピアがモチーフの一つになっているのですが、シェイクスピアの翻訳に寄与した坪内逍遙は、早稲田大学と美濃加茂市の両方にゆかりのある人物です。共通のテーマがあることで、関わる人の交流も深まるといふ、文化活動の新たな側面も知ることができました。卒業後も演劇や地域と関わりながら、さらに多角的な視点を養っていきたいです。

\*2024年度以降の入学者に対しては、全学副専攻「地域連携・地域貢献」の修了認定プログラムに移行

- ① 早稲田キャンパスの大隈ガーデンホールで行われた『夢、のち』の演劇公演。美濃加茂市では公演の映像上映と学生のトークコーナーが催された
- ② 津山市の地域連携ワークショップ最終日に使用したプレゼンテーション資料の一部。統一されたPRデザインの必要性を提案した



1



2

文化構想学部4年  
関口真生さん

演劇と地域連携の両軸で  
人の交流や防災活動を育みたい



教育学部3年  
松田由希菜さん

## 出身地である陸前高田市で 早稲田の学生として活動する

### 東日本大震災から13年を経て 求められる地域貢献を考え直す

岩手県陸前高田市の出身である私は、小学校1年生の時に起きた東日本大震災で、自宅が全壊する被害を受けました。将来は故郷に戻って貢献したいと考え、そのために学び、いろいろな経験をしようと早稲田大学に進学。1年生の時から平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)の早稲田ボランティアプロジェクト「陸前高田プロジェクト」に参加し、大学生という立場から地元で活動しています。

陸前高田市には、岩手大学と立教大学が共同運営する「陸前高田グローバルキャンパス」が組織した、地域ニーズと全国の大学生をマッチングする「陸前高田イタルトコロ大学」という事業があります。この仕組みを通じて参加した、陸前高田市の春の魅力を見つける企画では、住民や事業者の皆さんの話を聞いたり、街歩きをしたりして、撮影した写真をポスターにまとめ、地元の新聞に掲載してもらいました。また、陸前高田市はゆず栽培の北限の地といわれ、ゆずの木はこの地域に200年以上前から生息していたとされています。しかし地元でも「北限のゆず」を知らない方は多く、地域資源として活用できる余地が残っていました。そこで私は歴史を解明する活動にも参加。インタビューや文献調査を通じて得られた情報を冊子にまとめました。

一連の活動を通じて考えるようになったのは、「大学生だからできること」です。私が子どもだった震災直後は、がれき撤去や仮設住宅での支援活動がメインであり、自分自身も当時大学生だった方々にお世話になりました。その一方で震災から数年経ち、支援の形も変わるとともに大学生にできることは減っているとも感じていました。しかし実際に大学生として被災地に行ってみると、若者の人口流出が進んでいることもあり、求められることが多いことに気づかされます。あり余る時間と体力、若者ならではのアイデアや着眼点を活用できれば、もっと地域社会に貢献できると実感しました。

卒業後は働くことを通じて経験を積み、ゆくゆくは地元でゼロから事業を起こしたいと思っています。街という場で人々がつながるのが好きなので、皆が楽しめるコミュニティを作りたいです。



- 1 陸前高田市で栽培されるゆずの歴史について、インタビューや文献調査の情報をまとめた冊子「北限のゆずはどこから?～200年を超えるゆずと陸前高田の物語～」
- 2 陸前高田市の春の魅力を見つける企画では、地元の飲食店の方々にも取材を行った

## 早稲田大学の地域社会貢献

人間的力量の育成を目指す早稲田大学では、ボランティアプログラムや専門科目、実習など、教育を通じた地域社会への貢献を推進しています。

平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)所長・松居辰則教授が、地域貢献における方針と取り組みを説明します。



平山郁夫記念ボランティアセンター  
所長  
松居辰則(人間科学学術院教授)

### 学術知と現場体験の往還によって 地域に寄与する人材を育てる

早稲田大学では、教育・研究のポリシーとして、「人間的力量」を持った人材の育成を掲げています。人間的力量とは、地球上のどのような地域に行っても、多様な価値観や文化的背景を持った人々をまとめあげ、リードする力量です。この考えの下、本学ではさまざまな施策を通じて、学生の教育と地域社会への貢献に努めています。

国内外でのボランティア活動を展開・支援しているのが、2002年に設立したWAVOCです。WAVOCでは教育・研究・実践を通じた社会貢献、社会課題に対して当事者意識を持って取り組む人材の育成、新しい社会貢献のあり方の創造を目指し、多彩なボランティアプログラムを提供しています。特に2011年の東日本大震災以来、宮城県気仙沼市をはじめ東北地域との関係を強化してきました。活動の内容もがれき撤去など震災直後の支援から、イベントの補佐など地域振興を目指す支援へと、各地の課題に対応する形で変化しています。また今年1月に発生した能登半島地震では、9月時点で8回の学生派遣を行っており、今後も支援を強化していく方針です。

WAVOCが主催する活動以外にも、ボランティアに取り組む約30のサークルを支援しており、新歓でのブース出展やプレゼンコンテストなどのイベントを開催しています。また、社会貢献の持続可能性を高める上では、起業や産学連携でソーシャルビジネスに挑む学生をバックアップするなど、新たなモデル創出にも取り組んでいます。

WAVOCのボランティアに参加した学生は、「体験の言語化」という教育手法により、自身の体験を言葉にしながら振り返り、自己を社会の中で文脈化する思考プロセスを養います。また全学部の学生が履修可能な全学副専攻<sup>\*</sup>「社会貢献とボランティア」の指定科目を履修することで、基礎知識を身に付けることも可能です。こうした環境により、学生は「学術の知」と「現場体験の知」を往還し、自己を成長させていきます。

### 地域への理解を体系的に深める 全学副専攻を新設

WAVOC以外でも、本学は教育を通じた地域貢献を強化しています。地域の課題解決や発展について主体的に学ぶ意欲のある学生に向けた「地域探究・貢献入試」を実施しているほか、2024年度には全学副専攻「地域連携・地域貢献」を新設し、地域に関する専門科目や実習を体系化しました。例えば「法学×地域」「工学×地域」というように、学部の専門性と地域活動をかけ合わせることで、より実践的に地域社会に貢献することが可能になります。

当該副専攻の実習の一つ、「地域連携ワークショップ」は、自治体の協力を得ながら、本学の職員が企画・運営をしており、地域住民や関係者へのヒアリングをはじめ、現地でのフィールドワークに取り組むことができます。全国の自治体が直面する課題に対し、学生が解決策を直接提案するワークショップです。

WAVOCのボランティアや地域連携ワークショップは、地域の皆さまの協力によって初めて実現します。そして早稲田大学の強みは、全国に広がる卒業生のネットワークです。近年は在学中に活動した地域へ、卒業後に移住するといったケースも増えてきました。長年にわたり培われた地域とのパートナーシップは、各活動において力を発揮しています。今後も教員、職員、卒業生の連携によって未来を担う人材を育て、地域社会に貢献してまいります。

※全学副専攻とは  
学部の専攻分野を問わず、特定のテーマを追究できる制度です。専攻分野を補強、応用する分野を学ぶ、第二の強みを作るべく新たな分野に挑戦する…など、活用方法はさまざまです。在学中に修了必要単位数を修得し申請すると修了が認定され、卒業時に修了証明書が発行されます。

### WAVOCの理念

- 1 教育・研究・実践を通して社会貢献を行います
- 2 社会課題に対して当事者意識をもって取り組む人材を育成します
- 3 新しい社会貢献のあり方を創造します

WAVOCの最新の活動は、こちらからご覧いただけます。



都市部への人口集中や自然災害など、持続可能な地域社会を実現するために解決しなければならない課題は山積しています。土木デザインの力で生活・景観を保全し、発展させていく研究を行っている、佐々木葉先生にお話を伺いました。

# 豊かな暮らしを実現する鍵は生活の多様性と伝統の中に



理工学術院  
教授  
佐々木 葉

1984年早稲田大学建築学科卒業、1986年東京工業大学大学院社会開発工学専攻修了、博士(工学)。東京大学工学部助手、日本福祉大学情報社会科学部助教授などを経て、2003年より現職。NPO法人都上八幡水の学校副理事長。2023年度、土木学会デザイン賞最優秀賞受賞など。2024年6月、女性初の土木学会会長に就任。

## 地方ならではの生活をヒントに持続可能で豊かな暮らしを考える

「長期的な視点で人の暮らしを豊かにする」をテーマに、景観論・デザイン論を軸として土木の分野でまちづくりの研究をしています。特に地方都市・集落の生活、景観に関心があり、各地でのフィールドワークのほか、岐阜県郡上市八幡町にサテライト研究室を設置して、地域住民の方々との交流を重ねながら、研究成果の発信も行っています。

自然と共存している地方での生活には、興味深い暮らしの知恵や、今ある課題を解決するためのヒントが詰まっています。生活の多様性という観点においても、地方での暮らしの形を保全することは、都市や国全体のレジリエンスにつながっていくでしょう。例えば、経済危機や自然災害などによって暮らしの形を変えることを余儀なくされたとき、地方ならではの伝統や慣習から生き抜くヒントを得ることができる、というように。景観や生活の画一化が進む現代社会の中で、さまざまな暮らしの形を存続するにはどうしたら良いのか、景観・土木の観点から考え続けています。

## 土木デザインの力で人を育てる好循環をプログラム

土木デザインの大きな役割の一つに、「ここが価値のある場所だと分かりやすく表現すること」があります。例えば新潟県新発田市・古太田川周辺集落では、土でできた手作りの護岸や、「江<sup>くもろ</sup>浚い」という川の環境を維持するための手入れ作業など、水辺で生きる伝統的な暮らしの工夫が実践されています。私たち研究メンバーからすると守るべき貴重な慣習ですが、住んでいる方にとっては当たり前の、日常の光景でした。しかしそれも徐々に消えつつあります。そこで私たちは、身近にある「川」を起点に、人が自由に集まることのできる場の価値を再発見するため、川辺にテントやテーブルを設置したり、子どもたちと一緒に川やその周辺を探索したりと、住民同士の交流が自然と生まれるような、川に対する愛着を持つきっかけづくりに取り組

んでいます。

都市にはない、その地域ならではの自由で開かれた暮らしを知ることで、多様な考えを自分の中に柔軟に取り込むことのできる人材が育ちます。しかし残念ながら、このような場は現代において自然に発生することはありません。だからこそ、デザインによるプログラム作りが重要なのです。人が環境を作れば、その環境が人を育て、その人たちが良い環境を存続させる努力をする。そういったサイクルを作るために、土木デザインを活用していきたいと考えています。

社会環境工学科では、「空間デザイン」という講義で身近な土木施設の背後にある工夫や知恵を学びます。そこからステップアップした「空間デザイン演習」では、実際に土木のデザイン提案をするのですが、最初は全てをリセットし、特別なものを作ろうとする学生も少なくありません。もちろんそれもデザインなのですが、その場が本来持っている豊かさを高め、新たな行動のきっかけを作るのも立派なデザインです。こういった授業を通して、デザインの概念を単なる見た目ではない、より深いものに広げていくことを意識しています。

## 日常を支えるインフラづくりには生活者の声に耳を傾けることが不可欠

近年、技術の発展で以前より被害が減っているとはいえ、自然災害により環境が破壊される事例が多発しています。ただ、大雨や津波が全てを流してしまったとしても、ここがどのような場所で、どのような生活が営まれていたのか、必ず手がかりが残っているはずです。良い土木デザインができれば、たとえ時間がかかっても、災害前と連続した新しい生活を取り戻せると思います。今後は、地域住民が当事者として引き受けられる新しいインフラを作るために、最新の技術を活用しながら、そこで生活している人の話をよく聴いて、固有の最適解を探っていく人材がより必要とされていきます。時にはルールを柔軟に捉え直し、思い切った決断をすることも必要かもしれません。そういった勇気を持って舵を取っていく人材が一人でも多く育つことを祈って、研究を続けていきたいです。



鑄造実験／各務記念材料技術研究所



鳩の家／早稲田キャンパス



野球部春季リーグ戦優勝パレード／ランド坂



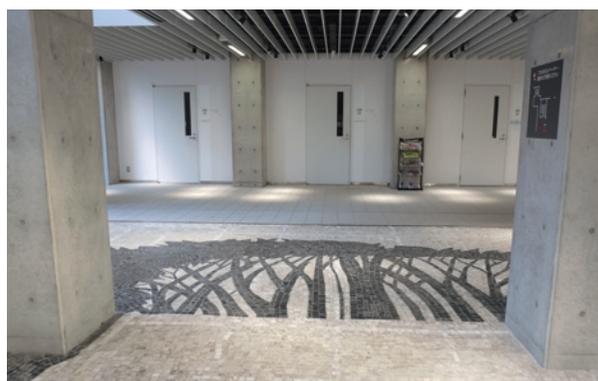
国際文学館内のスタジオ／早稲田キャンパス



「人とベガサス」像／所沢キャンパス



11号館／早稲田キャンパス



33号館／戸山キャンパス



大隈記念講堂／早稲田キャンパス



卒業式・入学式に際して設置された特製ガウンを着たワセダベア／早稲田キャンパス

# Seasons of WASEDA

各キャンパスの日常、四季折々の光景を、写真でお届けします。



キャンパスの写真を SNSで発信しています

Instagram  
早稲田大学公式アカウント  
@waseda\_university

早稲田大学が運営するInstagramアカウントでは、キャンパスの日常風景を発信しています。ぜひフォローしてください。



早稲田大学では、学位課程以外にも目的やライフスタイルに合わせた教育プログラムを提供しています。歴史や文化、芸術、科学などさまざまなジャンルの公開講座を、対面形式のほかオンラインでのライブやオンデマンドで開講しています。今回は早稲田大学オープンカレッジにて展開している「社会人のための必修教養講座 憲法が保障するもの」の一部をご紹介します。

イラスト=なかもら葉子

# 憲法が私たちに保障するものは何か

1947年の施行以来、70年以上にわたって社会の基盤となっている日本国憲法。どのような役割を持ち、国民は何を考えるべきなのでしょう。



## 日本国憲法の性質と国民の責任

私たちの日常生活の中で、身近な法律といえば、民法や刑法、道路交通法などがあります。それらの法律と、「日本国憲法」は全く違う性質を持っています。例えば民法は、人間相互の関係を調整するルールであり、私たちが守るべきものです。それに対して憲法は、国家と私人の関係を規律するルールで、国は国民に対し、信教の自由などの基本的人権を保障しています。そして憲法は、国家機関の権限を規律するルールでもあり、国会とは何ができる場なのか、国会議員にはどんな権限があるかなどを明記しています。つまり憲法とは、国家の役割とその制限について定めたものであり、国家が守るべきものなのです。そして憲法によって国家を縛っているのは、主権者である私たち国民です。私たちに、国家がきちんと憲法を守っているか、監視する責任があります。

もう一つの大きな特徴が、憲法を変更する際の条件が、ほかの法律と比べて厳しいことです。通常、法律は議会の過半数の賛成で制定、改正、廃止が可能です。しかし憲法の改正には、衆参両院の総議員の三分二以上からの賛成を得て、さらに国民

の過半数が賛成することが必要です。つまり、国民が多数決で憲法改正を望むだけでは変えられないということです。このように、ほかの法律よりも改正手続きが難しい憲法を、「硬性憲法」といいます。日本だけでなく、多くの国の憲法が硬性とされていますが、アメリカ合衆国憲法の制定に携わった第3代大統領トーマス・ジェファーソンは、硬性憲法に異議を唱えました。一度制定した憲法の改正が難しい場合、次の世代が願っても変えられなくなり、民主主義に反した「死者による支配」だと苦言を呈すのです。しかし民主主義を成立させるためにも、一定の権利は多数決の外に置くべきだという見方もできます。例えば選挙権や表現の自由などは、憲法で強く保障することによって、民主主義の前提を確保できます。また、基本的人権を侵すことは、仮に多数者であっても許されはいけません。そうした考え方から、現在多くの国で硬性憲法を採用しています。

## なぜ憲法は、最高法規だとされるのか

憲法98条に、「この憲法は、国の最高法規であつて、その条規に反する法律、命令、詔勅及び国務に関するその他の行為の全部又は一部は、その効力を有しない。」とあります。つまり、いかなる法律や条令も、憲法を尊重していなければならないのです。例えば基本的人権を無視した刑法や、学問の自由を侵すような条例は制定できません。

しかし、憲法が最高法規だと、いったい誰が決めたのでしょうか。たしかに98条に明記されていますが、実はこれは憲法自身が「憲法が最高だ」と主張しているに過ぎないのです。自己主張だけでは、根拠になりません。では真に大切なものは何か。それは、私たち国民が憲法に納得していること。主権者である国民が憲法を最高法規だと信じ尊重することで、初めて日本国憲法は本当の意味で最高法規だといえるのです。



早稲田大学 社会科学総合学院教授  
阪口正二郎

1960年生まれ。早稲田大学大学院法学研究科単位取得退学。一橋大学法学博士。専門分野は、憲法、比較憲法。東京大学、一橋大学、早稲田大学などで憲法学、比較憲法学について講じる。

オンライン講座も好評  
どなたでも受講できる  
「早稲田大学オープンカレッジ」

早稲田大学オープンカレッジでは、年間約1,500の対面講座のほか、オンライン（ライブ・オンデマンド）講座も年間約500クラス開設しています。また、オンラインでの受講が初めての方のために、無料で体験いただける講座もご用意しております。ライブの講座では終了後に収録動画を受講生向けに配信するため、遠方にお住まいの方もお仕事でお忙しい方も受講が可能です。ぜひ、ホームページでお好みの講座をお探しください。



あらゆる世代の  
まなびポータルサイト  
「まなびのコンパス」

早稲田大学が開講している多数の社会人向けプログラムをまとめてご案内するポータルサイトです。ノンディグリーのプログラムをまとめて掲載していますので「本格的に学部や大学院に入学するのではなく、スポットで何か学んでみたい」という方のヒントにもなります。



<https://www.wasecom.jp>





**1** ラクロス部男子  
森田が試合終盤に決勝点を挙げた



**3** 競走部  
1年生ながら見事に優勝を飾った千葉



**5** ボクシング部  
試合後、相手選手と握手を交わす高橋(左)



**7** フェンシング部  
女子フルーレはチームワークで強豪との戦いを制した



**2** 自転車部  
ゴール直前でスプリントする大仲



**4** アーチェリー部  
最上級生の塚本がチームを引っ張った



**6** 漕艇部  
大学勢では最上位となる3位に入った男子フォア



**8** 競走部  
権田は予選・決勝共に自己新を更新

# W-Sports

RESULT

## 「止まらない躍進」

写真提供=早稲田スポーツ新聞会

数々の輝かしい成績を誇る、早稲田大学の体育会44部、各部の活躍を紹介します。

**1** ラクロス部男子  
関東春の最強決定戦

5月25日 千葉・プリオベッカ浦安競技場  
関東七大学戦で優勝した一橋大を8対7で破り、春の王者に輝いた。

**2** 自転車部  
全日本学生選手権クリテリウム大会

5月26日 東京・大井埠頭  
積極的なレースを展開した大仲凜功が準優勝。

**3** 競走部  
日本学生個人選手権

6月14～16日 神奈川・レモンガスタジアム平塚  
女子400メートル障害で千葉史織が優勝。男子100メートルでは関口裕太が3位に入った。

**4** アーチェリー部  
全日本学生女子王座決定戦

6月15・16日 静岡・つま恋リゾート彩の郷  
近大との決勝戦に敗れ、3度目の準優勝。初の王座獲得にはあと一歩届かなかった。

**5** ボクシング部  
関東大学トーナメント

6月22日 東京・後楽園ホール  
女子ライトウェルター級で、高橋美波が連覇を達成。

**6** 漕艇部  
全日本ローイング選手権

6月20日～23日 東京・海の森水上競技場  
男子フォアと女子ダブルスカルで全体3位に入賞した。

**7** フェンシング部  
全日本学生王座決定戦

6月10日 東京・駒沢オリンピック公園総合運動場  
女子フルーレで優勝し、男子エペは準優勝。女子サーブルでも3位と好成績を収めた。

**8** 競走部  
U20日本選手権

6月27～30日 新潟・デンカビッグスワンスタジアム  
男子400メートル障害では権田滉が、女子100メートル障害では林美希がそれぞれ準優勝。男子1500メートルで吉倉ナヤブ直希が3位に入賞した。

体育各部の戦績を紹介する「W-Sports」を毎号掲載

早稲田学報

早稲田大学校友会が発行する卒業生向けコミュニケーション誌。年6回(毎奇数月15日)発行し、校友会費をご納入の方と定期購読をお申し込みの方のご自宅にお届けしています。「早稲田学報」は、さまざまな業界・分野で活躍する多彩な校友や校友会活動の紹介など、早稲田魂を揺さぶる話題が満載です。10月号の特集は「人は変われど変わらぬ酒場」。早稲田・高田馬場界隈の、昭和の時代から人を魅了しつづけている酒場を紹介します。



早稲田大学 校友会

校友会は、早稲田大学の第一回卒業生が出た翌年、1885(明治18)年に発足して以来、日本全国・世界各地に組織を広げて活動する同窓会組織です。校友の親睦を深め、母校・後輩を力強く支援するとともに、校友の人生を応援するサービスの充実にも努めています。在学生・卒業生のご父母で、会費をご納入いただいた方は、父母会員としてサービスを利用することが可能です。  
<https://www.wasedaalumni.jp/>



## パリ2024オリンピック・パラリンピック大会で在学生・卒業生が活躍

写真提供=共同通信社

### パリ2024オリンピック大会の主な成績

2024年夏にパリで開催された第33回オリンピック競技大会が、8月12日(日本時間)に閉幕。本学からは、在学生8名・卒業生25名が出場し、金メダル2個、銀メダル3個、銅メダル1個を獲得しました。



フェンシング男子フルレ団体で金メダルを獲得した松山恭助選手(2020年スポーツ科学部卒業/写真右より2番目)



フェンシング男子エペ個人で金メダル、フェンシング男子エペ団体で銀メダルを獲得した加納虹輝選手(2020年スポーツ科学部卒業/写真中央)



柔道女子57kg級で銀メダルを獲得した池田海実選手(スポーツ科学部4年/写真左)



セーリング混合470級で銀メダルを獲得した岡田奎樹選手(2018年スポーツ科学部卒業/写真左)



レスリング女子フリースタイル50kg級で銅メダルを獲得した須崎優衣選手(2022年スポーツ科学部卒業/写真右)

### パリ2024パラリンピック大会の主な成績

パリ2024パラリンピック競技大会が、2024年9月9日(日本時間)に閉幕。本学からは、在学生1名・卒業生4名が出場し、金メダル1個、銀メダル2個、銅メダル1個を獲得しました。

競泳男子50m平泳ぎ(運動機能障害SB3)で金メダル、男子100m自由形(運動機能障害S4)と男子50m自由形(運動機能障害S4)で銀メダル、男子200m自由形(運動機能障害S4)で銅メダルを獲得した鈴木孝幸選手(2009年教育学部卒業)

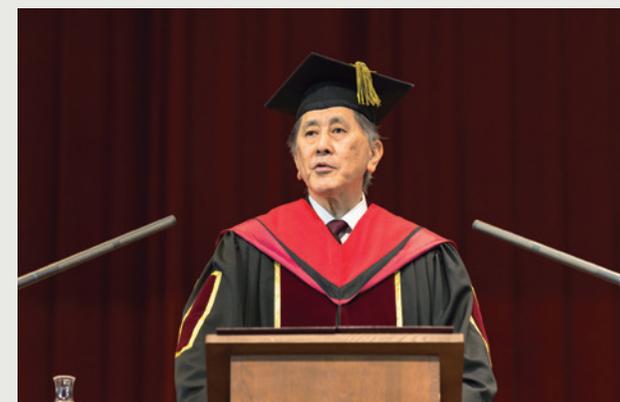


## 9月卒業式・入学式を挙行

2024年9月15日、戸山キャンパス早稲田アリーナにて、2024年度9月学部卒業式、芸術学校卒業式および大学院学位授与式を行いました。式典では、学位記授与に続き、田中愛治総長より卒業生へ式辞が述べられました。その後、萬代晃・校友会代表幹事からの挨拶がありました。

9月21日には、早稲田アリーナにて2024年度9月学部入学式、大学院入学式を実施。式典では、早稲田大学で「たくましい知性」と「しなやかな感性」、「響き合う理性」を育んでもらいたいとメッセージが伝えられました。

各式典は、出席者を卒業生・新入生本人のみに限定。同時にライブ動画を配信する形で実施しました。



式辞を述べる田中愛治総長(卒業式)



挨拶を述べる萬代晃・校友会代表幹事(卒業式)



最新のニュースは、早稲田大学オフィシャルウェブサイトで!



本ページで紹介したニュースは、早稲田大学オフィシャルウェブサイトでご覧いただけます。



CAMPUS NOWはウェブサイトでもご覧いただけます。

### 読者ウェブアンケート

皆さまのご意見を反映し、よりよい誌面にしていくためにアンケートにご協力ください。申請フォームはこちらのQRコードよりお願いします。



### 表紙写真

所沢キャンパスB地区湿地



かつてB地区の湿地には約170枚の水田がありました。2002年に湿地の乾燥化対策として水田の畦を復元し、水田的管理の効果を検証しています。2010年以降、循環する里山の恵みを実感してもらう活動として実際に稲作を開始、学生と市民の方々により毎年田植え、お米の収穫を行っています。

## NOW ON CAMPUS!

10月号の  
気になる撮影スポット



### 所沢キャンパスB地区湿地

所沢キャンパスは「首都圏に浮かぶ緑の島」とも呼ばれる狭山丘陵の北側にあり、キャンパス内には3haの湿地と雑木林が広がっています。高度経済成長期の宅地化や廃棄物処分場の造成などの波に飲み込まれることなく残った湿地とその周辺の環境を保全していきたいと、2003年、大学の自然環境調査室協力の下、学生たちが湿地保全活動をスタート。主に所沢キャンパスの学生を中心に、市民の方々とともに作業、調査、散策などを行っています。

[表紙掲載]

「CAMPUS NOW」  
読者アンケートに  
ご協力ください。



## WASEDA VISION 150

大隈重信が宣言した早稲田大学教旨を受け継ぎ、  
本学は、創立150周年を迎える2032年の本学のあるべき姿を思い描き、  
2012年に中長期計画“WASEDA VISION 150”を策定しました。  
2018年以降、これをさらに進化させるべく新たなスローガンとして  
「世界で輝くWASEDA」を掲げ、施策の検証と改善を繰り返しながら、不断の改革を実行しています。  
詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。  
<https://www.waseda.jp/inst/vision150/>



WASEDA University  
早稲田大学

制作協力 株式会社KWC  
次号は、2025年11月30日発行を予定しています。